

1. 研究計画

1-1 研究主題設定の理由

今年度から本格実施された学習指導要領のキーワードは、「資質・能力の育成」である。国立教育政策研究所(2016)（以下、国研報告書）は、「なぜ資質・能力¹の育成が重視されるのか」を整理している。そこには、これからの社会をつくるためには、一人一人が「何を知っているのか」だけでなく、「何ができるのか」「いかに問題を解決できるのか」が問われていると示された。そのため資質・能力（コンピテンシー・ベース）の教育課程への変革が求められる。

そこで、今年度の研究主題「**進んで学び 深く考える子ども**」を目指して（第1年次）を具現するために、国研報告書に依拠し「思考力・深く考える」の育成を位置付けた。ここには、「物事を「知っている」レベルから「分かる」レベル、「使える」レベルへ深めていくことが望まれる。」と説明している。また、進んで学ぶは、いわゆる主体的な学びであり、新学習指導要領の学びに向かう力、人間性等とも連動している。

ところで、昨年度の取組から、国語科、社会科、道徳科で考えを深める子どもについて臨床場面での研究を行ってきた。教科の特性によって差異があったが、その教科の理念や本質について議論し、各教科の考えを深めるとは何かについて子どもの姿を探りながら進めてきた。

この3教科の実践を皮切りとして、3年次には、その成果を各教科で示せるような総合的な実践研究を推し進めていきたい。

1-2 研究内容（授業改善の視点）

国研報告書(2016)は、資質・能力（思考力を中核）を育むために、図1²のように教科等の内容と資質・能力（思考力）を学習活動で繋ぐ教育が有効だとし、図の左側の教科等の内容だけを重視し、知識伝達・注入型の授業をいくら実施しても、右側の資質・能力

（思考力）は育たないと指摘している。一方、資質・能力（思考力）が大事だからと言って、例えば問題解決の練習をいくら繰り返しても、生きて働く問題解決能力は育成され難いとも述べている。国研報告書の要点は、意味のある文脈の中で、教科等の内容の中核となるビッグアイディア³（≡中心概念）を手掛かりに、問う価値のある課題の解決に向けて学習活動を組織することを通して初めて問題解決能力なども育まれ、こうした授業作りを繰り返すことで、教科等の内容と資質・能力（思考力）が一体化され、「生きる力」の育成に繋がっていくと主張している。

社会科の公害の学習で一例を示した。ビッグアイディア（≡中心概念）は、経済優先社会がもたらした環境破壊であり、それを学習活動（関連付ける・統合する）で繋ぎ、子どもが根拠をもとにしてなぜ公害がおこったのかを説明できることをねらっている。説明できた子どもは、論理的な思考が身に付いた、付いていると評価することができるが、短期的に思考力・深く考える力がどれほど身に付くのかという課題は残る。したがって、本質的には学びのサイクルを基に、実践を繰り返しながら学びの成果として「何ができるのか」「いかに問題を解決できるのか」を求めているかなければならないのだが、長期的な子どもの変容を見取することは現実的には容易ではない。そこで本研究では、学びのサイクルを基に単元等を構想する中で、子どものたちの変容を分析⁴しながら、「深く考える・思考力」に迫る表現等が表出したかを検証していきたい。

2. 実践の実際

2-1 低学年生活科から

◇ 主題設定の理由

学習指導要領において「気付き」は生活科のねらいに据えられ、その大切さは諸所で論じられて

きた。「気付き」とは、対象に対する一人一人の認識であり、知的側面だけでなく情意的側面も含まれる。そして、児童の主体的な活動によって生まれた気付きは、吟味や一般化がされていないものの、確かな認識へとつながるものとして重要な役割をもつとされている（学習指導要領（2017））。田村（2009）は、「気付きは次の自発的な活動を誘発する」とし、活動や体験を繰り返したり他者と共に活動したりしながら、気付きの質を高めて、次の活動の充実につなげていくことを重要視している。

そこで授業者は、気付きの質に着目し、その質を高める手立てについて追究した。

◇ 実践の手立てと成果

下記2点を実践の手立てとした。

- ①学校生活の中核にヤギとの関わりを位置づけた。
 - ②学習者の気付きを表現・共有する場面を設定した。
- とりわけ、授業者は、生き物との継続的な関わりを通して、気付きを表現・共有化し、価値付けることで、気付きの質を高めようとした（写真1）。

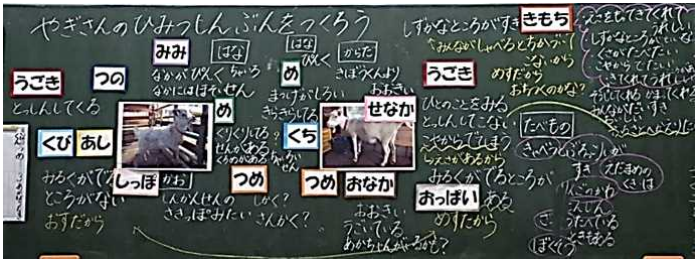


写真1 手立て②の実践

やぎとののかわりを中核に学校生活を送り、意図した共有、教師の価値付けの場面を経て、学習者の気付きの質は変容した（表1）。

	自覚化された 気付き	関連付けられ た気付き	対象の行動に 関する気付き	対象の内に 迫る気付き	自分自身につ いての気付き
単元の初め(6月)	15人	4人	6人	5人	1人
第8時以降(11月)	25人	20人	16人	8人	5人

表1 学習者の気付きの変容（n=25）

◇ 研究の成果

生活科の教科の特性上、「自分自身」を学習対象とする。学習内容が学習者自身である以上、この実践での中心概念は、「自分自身についての気付き」と捉えることも可能であろう。その究極の姿を指導者は見据えながら、発表する、聞く、関連付ける学習活動を行った。そして、学習者に対象の見た目を表現させるだけでなく、情意面を想像させたり、行動の意味を探ったりさせる活動を設定して気付きの質を高めていった。また、対象とののかわりを継続的に行いながら、学習者が常に気付きを蓄積できるような環境を整えることで、主体的な活動を続けることができた。このスパイラルの中で表現したい学習者が育ち、考える場面を意図的に設定することで思考力の育成が図られた。

ただし、思考力の育成の中核に据えた研究において、今回の改訂の鍵となる生活科独自の**見方・考え方を働かせること**との繋がりを言及するまでは至らなかった。

2-2 中学年算数科から

◇ 算数科と思考力の育成

算数科では、昭和33年学習指導要領から「数学的な考え方」という語が用いられ、平成10年には「算数的活動」という語が登場し、平成29年度の改訂で「数学的活動」と小中高で統一された。そして、H

29年度の改定を解釈すると、数学的な問題発見や問題解決の過程を重視していること、算数科固有の**見方や考え方を働かせること**が挙げられることから、**思考力育成に貢献できる**であろう。例えば、乗法九九表からきまりを見付ける活動、面積の求め方を考え説明する活動、比例の係数を用いて問題を解決する活動などが考えられる。

◇ 主体的な学びを通しての思考力育成（実践構想）

- ① パフォーマンス課題の設定
知識やスキルを使いこなすような課題を設定し、獲得したスキルを活用する力を身に付けさせる（思考力の育成）。
- ② 自分事として考えられる学習活動の設定
現実にある問題・課題を設定し、子どもの主体性を高める。
- ③ 課題解決のための学習方法や学習形態の工夫
自分自身で課題と対話すること、ペアやグループで協働する場面等の工夫をする。

◇ 実践の成果と課題

単元を貫くパフォーマンス課題を設定し、獲得したスキルを活用しながら、次時の問題解決場面に繋げることは有効であった。ただし、現実の場面を自分事として捉えることには課題があったものの、パフォーマンス課題が適切であったため、主体的に学ぶ学習者の姿が散見された。また、算数科では個人での思考場面が改めて重要であると確認された。さらに、学習途中で思考が整理されていなかった学習者が、一単位時間末には他者と対話する活動（グループ、一斉学習）を経て、理解が深まった学習者も出現した。

3. 成果と課題

3-1 成果

実践を中核に、生活科（2-1）で「思考力」についての実践について知見を得ることができた。また、教科の理念や本質について議論し、生活科の教科の価値を学ぶ好機となった。算数科（2-2）では、主体的に学ぶ姿や数学的な活動の意義について探り、「思考力」の育成について議論することができた。

3-2 課題

市教委訪問で実施予定だった算数科は、社会情勢を鑑みて、極少人数の参観に限定したため、複数人での協議や多面的な授業評価はできなかった。したがって、思考力の育成についての成果までは導出できなかった。

4. 今後に向けて

昨年度からの実績もあり、国語科、社会科、算数科、生活科、道徳で思考力育成の臨床的な研究を行ってきた。思考力を育成するプロセスの概観はつかめてきたものの、全体的にアプローチが見え難かった。今後は、思考力の育成のための鍵となる、各教科における**見方・考え方を働かせること**に着目し、研究・実践を推進していく。

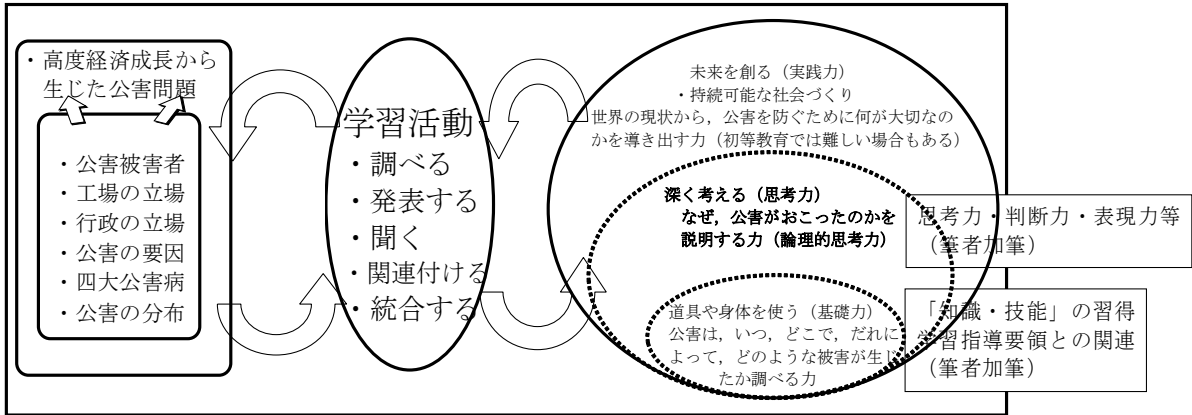
参考文献

- 国立教育政策研究所(2016)：国研ライブラリー資質・能力〔理論編〕,東洋館出版社,245p.
田村学（2009）：『今日的学力をつくる新しい生活科授業づくり』, 明治図書,154p.
文部科学省(2017)：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説算数科編』,東洋館出版社,99p.
文部科学省(2017)：『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説生活科編』,東洋館出版社,169p.

1 国研報告書は、資質・能力を次の3点として定義している。

- ① 学び始めには学習に使う手段、学び終わりでは学習内容を含み込んだ次の学習のための手段。したがって、方法知でありつつ、内容知も含み込んだもの。
- ② 知識の質向上のために必要不可欠な手段かつ目標。（以下略）
- ③ 「資質」を中心に人格（価値・態度等）に関わるもの。（以下略）

2



- 3 児童生徒が学習したことの細部をほとんど忘れた後でも、長く覚えておくべき広く重要な本質の理解であり、子どもたちが学ぶ大事な概念のことである。
- 4 同様の問いを学習前と学習後で比較しながら、個の変容を見取るなどの分析方法がある。